第二一回大会 印象記

第二一回大会
二〇二二年三月二六日(土)一三時～
ZOOMによるオンライン配信
協力　立命館大学衣笠リサーチオフィス・加藤周一現代思想研究センター
特集〈亡霊〉としての横光利一――西欧・アジア体験の衝撃と余波――
◇講演
壮大な挑戦と平俗な蹉跌――加藤周一が観た横光利一――
加藤周一現代思想研究センター顧問　鷲巣力
◇研究発表
藤原崇雅　戦後における武田泰淳の横光利一に対する評価
仁平政人　戦後の川端康成における横光利一――小説「自然」を手がかりに――
◇シンポジウム
パネラー　鷲巣力　藤原崇雅　仁平政人
ディスカッサント　山崎義光
司会　田口律男

シンポジウムについて

超越的な概念の不在と「雑種」としての文化

ディスカッサント　山﨑　義光

本特集は横光が直面し提起して終わっていない問題を「亡霊」として捉える企画だった。

講演と二つの発表は、横光が戦後どう評価されたかという視角から捉え直すことを趣旨とした。私の役割は三者をつなぐ観点を示すことにあると考えた。そこで、加藤周一「戦争と知識人」（1959）「日本文化の雑種性」（1955）、武田泰淳『上海の螢』（1976）の「雑種（ツァチュン）」の章、川端康成「自然」（1952）を点綴しながらコメントした。ここでは当日述べた要点を記録しておきたい。

「戦争と知識人」で加藤は、戦時下における「天皇神格化の時代錯誤とそれに伴うすべての理性的思考の破産」の要因は、「国家に対する忠誠概念を超えて国家の善悪を判断する規準が、戦争中の日本の知識人」になく、「超越的な価値概念・真理概念」を日本の近代が生んでいなかったことにあると論じた。「日本文化の雑種性」では、近代において「日本文化」が思考される際、二つの「念願」がはたらいたと論じていた。一つは「日本種の枝葉をおとして日本を西洋化したい」念願にもとづく「近代主義」的立場で、もう一つは「西洋種の枝葉を除いて純粋に日本的なものをのこしたい」念願にもとづく「国家主義」的立場である。それに対して、そもそも外来のものを受け入れながら日本文化が形成されてきたことを認め「純粋日本化にしろ、純粋西洋化にしろ、およそ日本文化を純粋化しようとする念願そのものをすてること」に「日本文化」理解の要諦があると論じた。こうした観点から加藤の横光批判を見直すと、古神道のみそぎに象徴されるような「純粋日本」を見出す欲望に憑かれ、国家の概念を超えられなかった点に横光の「理性的思考の破産」をみたと理解できる。加藤はそこを手厳しく批判した。

武田の横光評価の土台は、「理性的思考の破産」よりも「雑種性」にあったのではないか。「雑種（ツァチュン）」の章は、大東亜文学者大会で南京を訪れた頃を描く。南京は「密集したまま分裂の様相を示している上海の複雑な魅力には、遠く及ばなかった」という印象や道中、上海での交友を描く。この中で横光『上海』とともに『旅愁』に言及し「彼にとって、大和心も祓（みそぎ）も「イヤサカ！」も正しいのだ」が、ヨーロッパ文化も認めないではいられない「矛盾の重荷によろめいて」いたと評した。この後、匈奴に嫁した王昭君から「雑種」に思い当たり「ツァチュンを避けて通るわけにはいかない」と考える。この章の終わりに印象的な場面がある。新年会で酔い潰れて服を脱がされ、ふくらんだ「隠しどころ」が「どこか四次元空間の異性に向って突きだ」されている「解放」を感じながら、「純血も雑種も、ほかのどこからでもなくて、この一点から発生して地球を蓋いつくすのだ」と考え「イヤサカ！」と思い眠る。武田の横光評価の基底には、アジアの帝国主義世界を上海に見たことへの共感とともにその不徹底や矛盾を批評しつつ、「雑種」的に文化が交配した現実に真正面から向きあったことへの敬意があったのではないか。

川端の小説「自然」で描かれたのも〈雑種〉的な人物だったと捉えうる。「自然」は、横光をモデルとする、亡くなった「友人」がかつて泊まった温泉宿を「私」が訪れ、そこで旅芸人だった瓜生と出会い話を聞く物語である。宿の「部屋」を介して友人の記憶と瓜生の半生

は緩やかに重ね合わされる。瓜生は「パンパン」に貢がれた男で「自然の花と見まがふ造花」のような女らしさを感じる人物と語られた。軍人の父をもち、故郷を失ったデラシネ的人物で、戦時中は女として生き、性別アイデンティティも二重に生きたことが語られる。〈雑種〉化した「造花」という形象に「友人」のありうべき幻影を揺曳させたと読めるのではないか。

人・モノ・カネ・文化がグローバルな地平で交通し衝突し混淆して雑種化するとともに、国家間の国際関係で抗争し分断され、国家概念を超越して捉えることの困難は、二一世紀の現在も終わっていない。そこに「亡霊」としての横光の現実性が見えてくるように思われた。超越的な視点から鳥瞰できない雑種的地平の只中で、人・モノ・コトに覇権と文化的差異が複雑に関わり連動する二〇世紀前半の世界を、時に荒唐無稽で面妖な表象を含みながら、表象することに格闘し迷走もした横光が遺したテクストの騒音のような現実性である。